

絵本についての一考察

—児童文学との関連において—

野 口 栄 子，山 中 喜 久 子

On the Picture-Book
— In Relation to Child-Literature —

EIKO NOGUCHI, and KIKUKO YAMANAKA

5才児と6才児の32名にたいし、ことばのない絵本をみせて話をつくらせ、またことばのある絵本をみせて絵画を描かせた。それを創造性の評価基準によつて分類し、創造性の高低、年齢による相異、絵画とことばという表現手段の差を考察するものである。創造性について、また絵本と児童文学についての検討の一助としたい。

I 序 論

II 目 的

III 実 験 (1) 方法

(2) 手続

IV 結果の処理 (1) 資料の整理

(2) 結果の処理

V 結果の考察

VI 結 論

VII 要 約

VIII 今後の問題

IX 資 料

X 参考文献

I 序 論

日本児童福祉審議会文化財部会が昭和41年に出版した「こどものための文化財」¹⁾という冊子には、児童文化を次のように規定している。「(1)児童の衣食住に関する文化 (2)児童の創造活動の所産としての文化 (3)児童に伝承させる文化 (4)児童文化を助長または普及する機関・施設 (5)児童の文化活動の組織」すなわち児童の日常生活にはじまり、知、情、意を発達させるためのあらゆる文化と文化活動を含むものであるとしているのである。

児童文化についての研究はこれまでも数多くなされているが、児童文化論²⁾には一般的概論的なものがほとんどといつてよい。このことは児童文化が哲学的ともいえる児童観にはじまつて、マスコミや評論にいたるあまりにも広範囲な諸現象を包含するものであるためである。また子どもと大人を分けて子どもを何か特殊なものと考え、子どもと大人の間に断絶を設けたことにも由来している。子どもを幼いもの、美しいものとしてみた大正時代の童心主義は、そののち多くの非難をあげているが、それにもかかわらず現在なお童心主義は児童文化の

主要なテーマであり、それにかわる方向が見出されていないことは、現代の日本の文化の方向性のなさを反映するものであるとともに、児童文化の研究の未熟さを示すものといつてよいであろう。

児童文化論の本質は、同時に個性をもつた人間としての児童の探求でなければならない。子どもの文化においては、人間の喜怒哀楽の感情が尊重されなければならないが、これは大人の文化にも通じるものである。大人も子どもも、人間は聴覚や視覚そのほかの感覚を通して自己を解放し、そこから自己の新しい個性を創造していく。文化とはこの意味において手段であり、媒介であり、また解放の場であり、したがって人格を形成する上で大切な役割を果すものであるといえる³⁾。

児童文化の規定のうちの(3)に分類されている児童文学についていえば、古くは奈良時代や平安時代初期の説話や縁起絵巻にまでさかのぼることができる。児童文化における児童文学は非常に重要な意味をもつたものであるが、わが国において子どものための文学が独立するまでには明治中期まで待たなければならなかつた。そののち児童の感情や意志の発達に児童の読みものがどのような影響を与えるかという児童文学の研究⁴⁾は、児童研究の

成果に伴い、主として児童心理学や民俗学や教育学などの立場からなされてきた。しかしながら純粋に文学の立場から児童文学の創造性や芸術性を取扱った研究はほとんどなく、そこに文学としての基盤をもたない児童文学研究の性格が生れたと考えられる。

児童文学の文学としての性格の弱さは、とくに教育の面に強くあらわれている。すなわち児童における文学教育は、読む・書く・聞く・話すという言語の能力を発達させるための国語教育として扱われてきた。ところがここ数年らいこのような弱さにたいして新しい見かたをもつ研究が、児童文学に携わる人々の間から起つてきている。それは文学におけるひとつの世界——作者自身が作品のなかで表そうとした主題に関連して——を子どもにどのように語りかければよいか。そのためにこれまでわれわれが理解していたと思つてゐる子どもの心が本当に子どもの声に直結したものであるのか。子どもの理解のしかたを創作をしていくうえでもういちど考えなおしてみようとするものである⁵⁾。そこではことばを何か具体的な感覚体験（たとえば絵画のような）を通して提示しようという試みがなされている。ことばによるイメージの世界は抽象的なものであり、年令の低い子どもにとつては理解がかなり困難なことがらである。そこで絵画を導入することによつて具体的なイメージを得る補助とするというのである。そこで絵本が重視されてくる。もちろん絵本といつても無批判に何でもよいというのではない。そこから子どもの創造力が開発できるようなものでなくてはならない。子どもが絵本に触れ、眺め、読むことで心の遊びの楽しさを知ることが絵本のもつ意味であり、ここにおいて児童文学における絵本の位置づけも生れてくる。文学が絵画によつて成立し、絵画が文学に助けられるということである。そこではいわゆる純粋言語的文学は影をひそめてしまうのである。そこでこの小論では、みる人によつてどのようにも変りうる自由な絵本⁶⁾⁷⁾（資料1）と作品としての形式の出来上つた絵本⁸⁾（資料2）では子どもの創造性のあらわれかたはどのように異なるであろうか。また表現手段を言語と絵画に変化させればどのようになるかという仮説から、児童文学との関連における絵本の研究のひとつの試みをおこなつたのである。

II 目 的

上述のような考えをもとに、本研究では子どもの創造性について次のような点を実験的に明らかにしようとするものである。

- (1) 子どもの創造性は発達的にどのように変化する

か。

芸術教育の分野では、種々の芸術的表現方法のなかでも言語による表現の欲求が正確な形式をとつてあらわれるのは、12～13才になつてからとされている。これに関してピアジェ⁹⁾は、幼児の言語的思考の世界は自己中心的であり、この自己中心性から意識化の困難が生じ、関係の判断ができにくく、無統一な乱置がおこなわれたり、でたらめな脈絡をつけてしまうところから混淆がおこるというような特徴を説明している。しかしながらそのような言語のなかにも、各年令に応じた創造性を発見することが可能と考えられる。また描画活動においても、色と形という表現手段を用いて、年令に応じた創造性が示されるものと思われる。それは年令的にどのように示されるものであろうか。従来の研究では、創造性は知能や社会性の一環としてとらえられることが多く、創造性それ自体の立場から考察されることはほとんどなかったといつてよい。ここではこのような点から創造性独自の研究方法について考える手がかりをつくりたい。

- (2) 本研究において創造性とはどのようなことか。

創造性がゆたかであれば、その表現活動は言語あるいは描画などの表現手段の相異を問わず、経験や心的内容をゆたかに表現するものと考えられる。ここでは創造性をそのような表現のゆたかさとして把握したい¹⁰⁾¹¹⁾。

- (3) 創造性はどのようにして測定されるか。

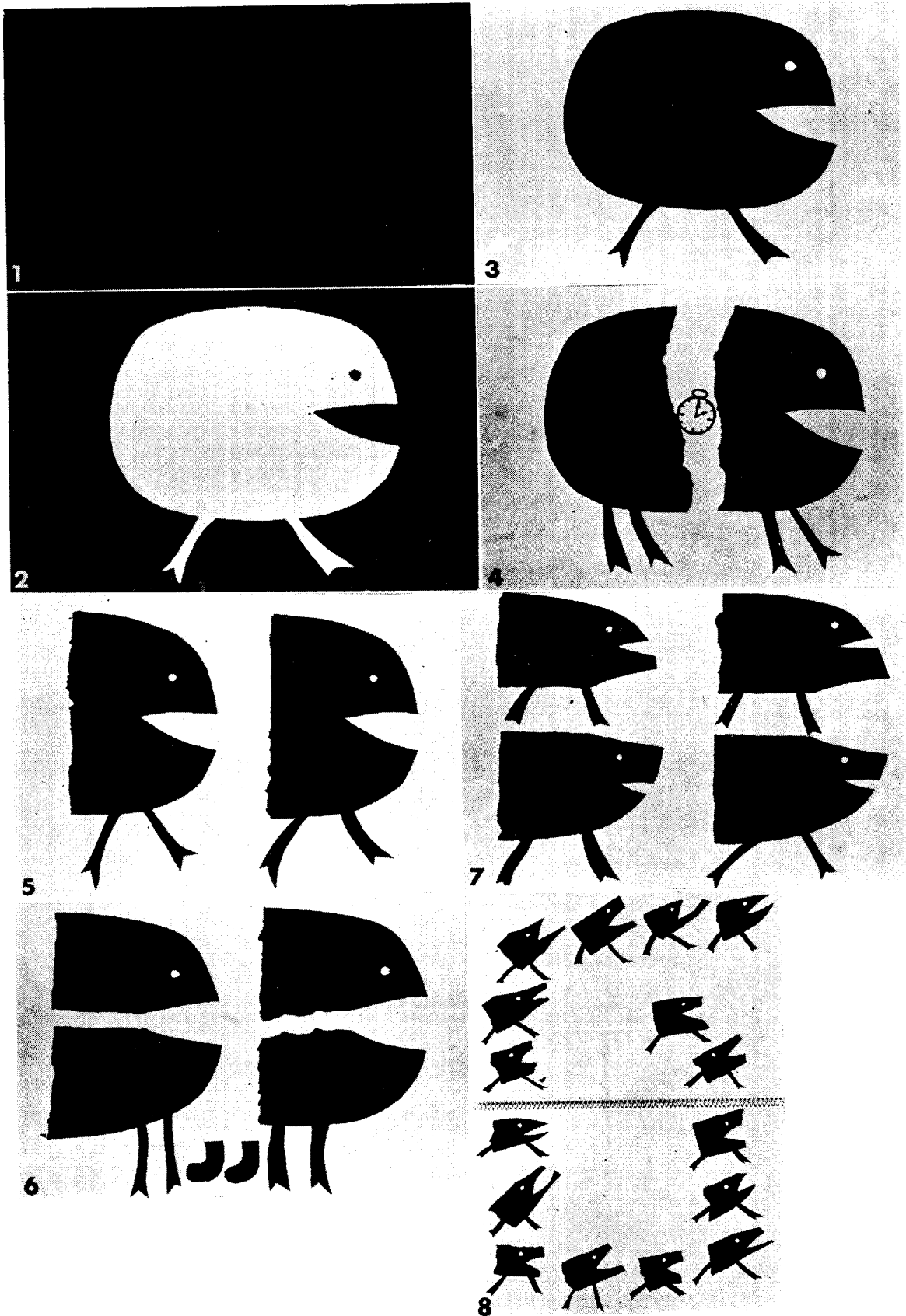
絵画を用いて児童の性格の投射をとらえて診断しようとするものには C. A. T., Blackie Test などがあるが、これらのテストは、児童がそこから「何を見出し考えるか」に関連するものであつて、「どのように見て考えるか」という表現行動を分析するものではない。従来は創造性を測るためのテストについての研究は、ギルフォードを中心になされてきた¹²⁾。それは思考を集中的思考と拡散的思考に分け、前者を知能テストで後者を創造性テストで測ろうとするものである。しかし現在では創造性テストはまだ純粋に創造性を測定しようとはいひ難い。創造性の因子¹³⁾として、筆者らは①流暢性 (fluency) ②柔軟性 (flexibility) ③独創性 (originality) ④具体性 (elaboration) の四つをあげ、これらの因子をもとに言語性テスト (Story Making)、非言語性テスト (Picture Drawing) に共通する評価基準を作成した。この研究では創造性を実験の資料整理のところで示す分類によつて言語と描画の二面から考察したい。

III 実 験

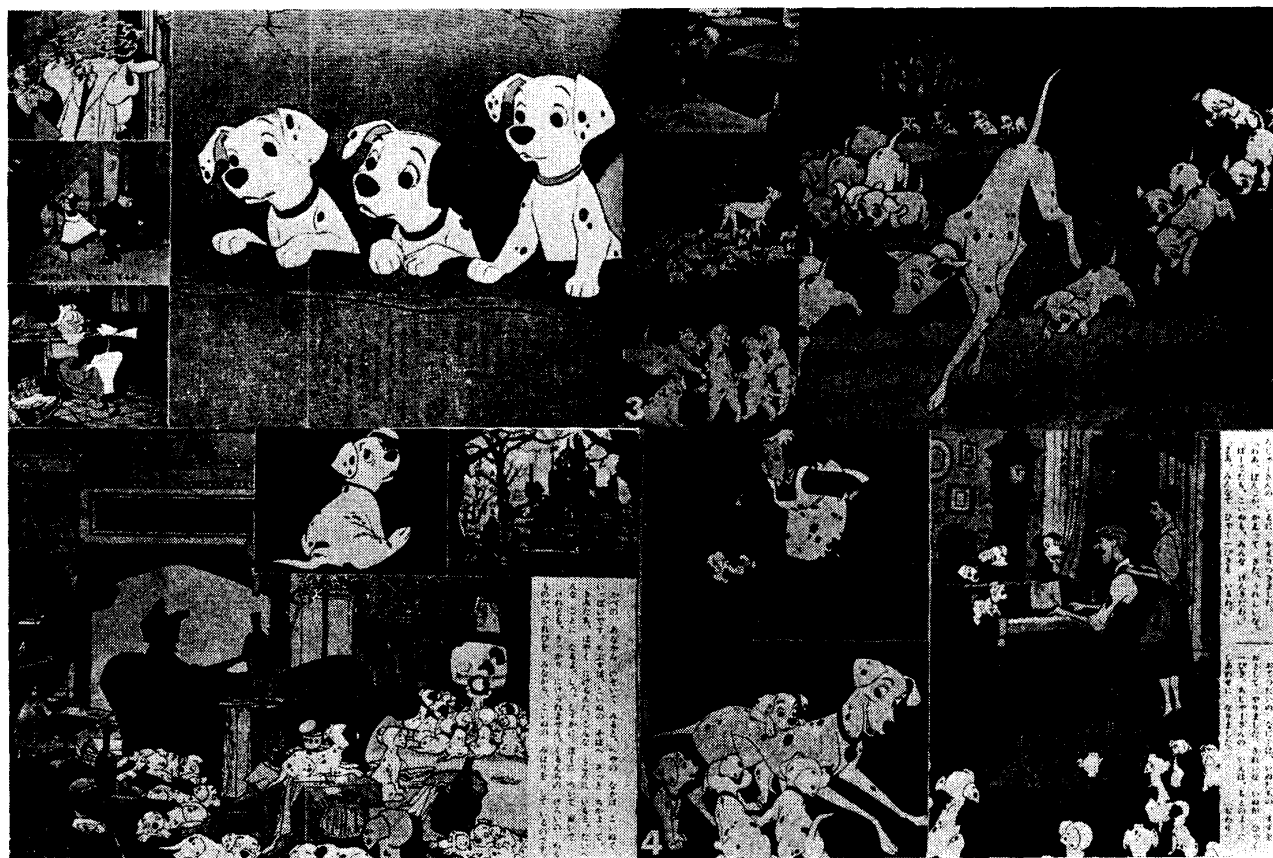
- (1) 方法

子どもに課題として二種の絵本に関する一定の指示を

資料 1. びり びり



資料2 101匹わんちゃん大行進 (講談社より抜粋)



与え、それについての言語を記録し、さらに自由画を描かせ分析する。

被験児 5才児16名, 6才児16名計32名を被験児とした。

実験時期および場所 1968年2月29日～3月11日京都教育大学附属幼稚園

(2) 手続き

(1) 言語性テスト——Story Making

八つ切大の画用紙9枚に黒色紙を貼りつけた絵本⁶⁾(資料1)を作り、絵画を見せながら次のような指示を与える。「くろい紙をやぶいていたらへんな動物が生まれました。“びりびり”という名前をつけたら、ひとりで歩きだしました。まだお話をつくっていないので困つてしまうから楽しいお話をつくってくださいね。」この指示ののちに話ができなかった被験児にたいしては、「あら、へんな動物ができましたよ。」「まつくろですね。」「あら、二ひきになりましたよ」「おやおや、四ひきになりましたね。」「こんどはどうなるかしら。」などの指示を与え、また被験児が物語る間はたえず激励を与えると同時に、「それで?」「それから?」「どうして?」などのことばを挿入して、物語を進行させた。実験は2人1組として16組におこない、記録はテープレコーダーによ

り言語を、観察により行動や表情を記録した。

(2) 非言語性テスト——Picture Drawing

講談社ディズニー絵本:101匹わんちゃん大行進⁸⁾(資料2)を見せながら、物語の筋を話してきかせた。そのあと八つ切大の画用紙一枚と25色クレパスを与え、「いまのおはなしをきいて感じたことを何でもいいから描いてごらんさいね。」と指示し、自由画を描かせた。実験は年令別(5才児, 6才児)に分けた2グループにたいておこなった。

IV 結果の処理

(1) 資料の整理

(a) 被験児のC. A., M. A., I. Q.を一覧表にした,(資料3)

(b) 言語および描画を、創造性が高いと思われる項目をもとに作成した評価基準(表1)にしたがつて分類した(資料4, 5)。

(c) 上記のように分類作成した評価基準をもとに、言語および描画について各個人の得点をそれぞれ算出した。

(d) 言語および描画における平均得点を、年令別に2グループについて算出した(表2)。

表1 創造性を測定するための評価基準

Story Making		Picture Drawing	
1	生活体験に固着せずイメージを発展させられる	自由でのびのびしている	
2	連続性をもち筋がある（起承転結がある）	まとまりをもった構成を示す	
3	いわゆるお話の型にはまらず独自の内容がある	独自の目でみた発見を絵のうえでしている	
4	絵本制作過程（紙をどのように切つていくか）をとらえている	絵本の内容の全体的な把握がある	
5	話の過程の数、形、大きさが完全にとらえられている	登場人物に不足がない	
6	絵にない人物や事物が物語にあらわれている	絵にない人物や事物の挿入がある	
7	話の過程を色でとらえる	色彩の豊富さがある	
8	これまで知っている月並な話のくりかえしでない	これまで知っている月並なシエマのくりかえしでない	
9	ことばにリズムがある	動きのある把握ができる	
10	いきいきと興味をもつて話す	いきいきと興味をもつて描く	

一項目を1点とし10点を最高とする

表2 年令別による創造性のあらわれかた

	Story Making		Picture Drawing		Total
	\bar{X}	SD	\bar{X}	SD	
5才児	3.81	(8.02)	4.51	(3.92)	8.32
6才児	4.93	(7.31)	4.63	(3.42)	9.56
Total	8.74		9.14		17.88

(d) 言語および描画における合計得点を、0～6、7～12、13～20の三段階に分類し、それぞれ創造性が高い、普通・創造性が低いと仮定する。創造性が高いグループと低いグループについて平均得点を算出した（表3）。

表3 創造性の高さによる差異

	Story-Making	Picture-Drawing	Total
創造性の高いグループ	7.57	6.71	14.28
低いグループ	1.09	3.36	4.45
Total	8.66	10.07	18.73

(2) 結果の処理

(a) 創造性は言語よりも描画に高くあらわれるか（表4）。

(b) 子どもの年令が増加するに従い、言語であらわされる創造性は高くなるか（表4）。

(c) 言語と描画は創造性という点で関係があるか、あるとすればどの程度か（表5）。

(d) 創造性の高い子どもにおいて、創造性は描画よりも言語に高くあらわれるか。

(e) 創造性の低い子どもにおいて、創造性は言語よりも描画に高くあらわれるか。

表4 年令と条件の二要因分散分析

	SS	df	MS	F
Between Subjects		31		
A	6.24	1	6.24	0.76
Subjects within Group	245.84	30	8.19	
Within Subjects		32		
B	0.64	1	0.64	0.15
AB	4.00	1	4.00	0.97
B × Subjects within Ggroup	123.22	30	4.11	

表5 創造性における言語と描画の連関

得点	Picture Drawing	
	10～7	3～0
Story- 10～7	5	3
Making 3～0	2	4

$\phi = 0.32$

V 結果の考察

(a) 創造性は言語よりも描画においてわずかにうまわつてあらわれるが、有意差は認められない。

(b) 年令的にみて6才児は5才児よりもやや言語においてすぐれているが、描画ではその差はほとんどみられない（図1、2参照）。

この結果からみると、5才児では言語および描画ともに創造性の高低の程度において比較的増減のない一定の傾向を示しているが、6才児では高から低へ移る過程でいつたん減少する傾向がみられ、これはとくに描画において著しい。すなわち5才児ではまだ確定した表現形式をもっていないため、型にはまらない自由な創造が未熟ながらもなされるが、6才児になるとある程度型にはまっ

図1 言語による創造性のあらわれかた

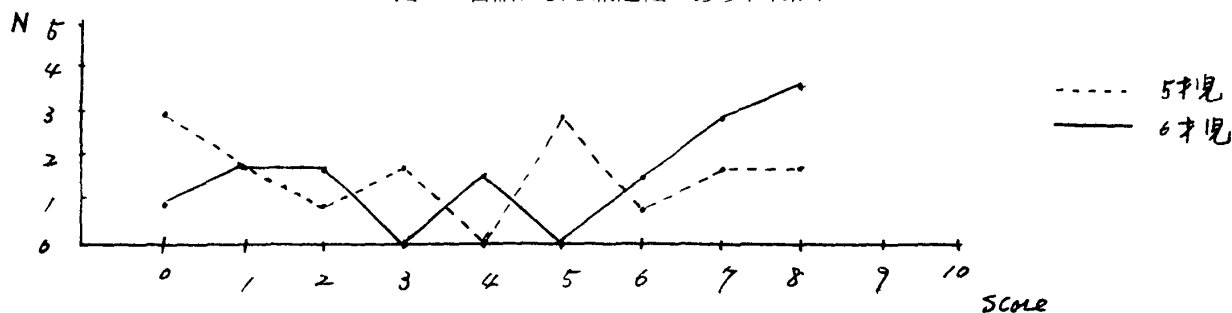
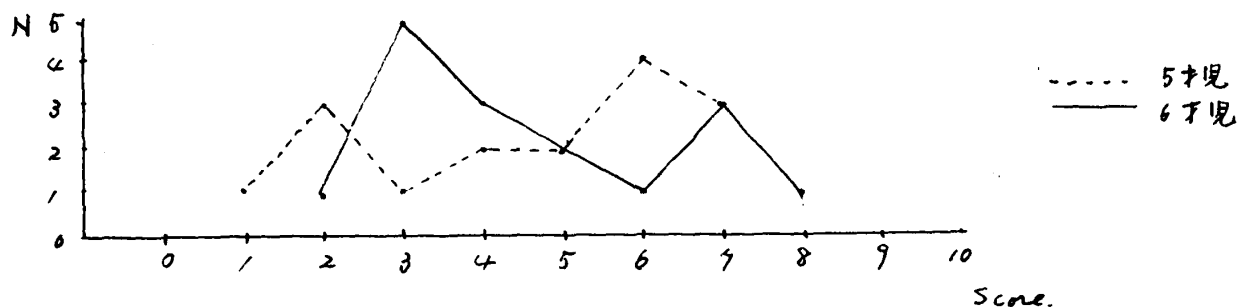


図2 描画による創造性のあらわれかた



資料3 被験児の C. A., M. A., I. Q. 一覧表

5 才 児	C. A.	M. A.	I. Q.	6 才 児	C. A.	M. A.	I. Q.
1. T. K.	5 : 2	7 : 2	142	1. R. M.	6 : 1	10 : 1	166
2. H. N.	5 : 2	7 : 1	136	2. K. T.	6 : 1	8 : 1	133
3. Y. N.	5 : 2	5 : 3	105	3. H. F.	6 : 1	8 : 8	129
4. E. Y.	5 : 5	7 : 8	147	4. M. K.	6 : 3	9 : 2	146
5. M. F.	5 : 5	7 : 8	147	5. H. K.	6 : 5	9 : 9	152
6. K. T.	5 : 5	6 : 8	129	6. S. M.	6 : 5	9 : 7	149
7. N. Y.	5 : 6	8 : 1	149	7. H. S.	6 : 5	9 : 4	145
8. H. T.	5 : 8	8 : 4	148	8. T. F.	6 : 7	8 : 10	135
9. Y. H.	5 : 8	6 : 1	110	9. T. M.	6 : 9	10 : 6	156
10. H. S.	5 : 9	8 : 4	148	10. H. O.	6 : 9	9 : 8	144
11. E. U.	5 : 9	8 : 2	144	11. K. H.	6 : 9	8 : 3	122
12. Y. M.	5 : 9	7 : 4	132	12. K. Y.	6 : 9	8 : 2	121
13. N. M.	5 : 9	7 : 4	131	13. Y. H.	6 : 9	7 : 8	114
14. S. H.	5 : 9	7 : 3	129	14. A. B.	6 : 10	10 : 1	148
15. T. S.	5 : 10	7 : 3	128	15. M. N.	6 : 10	9 : 7	140
16. M. T.	5 : 10	6 : 1	110	16. M. T.	6 : 10	8 : 4	122

てきて、話を話として、絵画を絵画としてつくりあげていくようになる。またその表現は、形式的にはなるが、5才児にみられる直観的なしかし断片的な自己表現から一歩すすみ、自らの努力による創造性が生れてくる。したがって創造性が高いか低いかは、5才児と6才児ではすこしことなつたありかたで明らかになると考えられる。

(c) 言語において高い創造性を示した子どもは、描画においても高い創造性をもち、反対に言語において低い

創造性を示した子どもは、描画においても低い。しかしこの差は本実験のばあいには被験児の数がすくなかつたため、低い連関でしかみられなかつた。

(d) 創造性の高い子どもは、言語においても描画においても高い得点を示し、言語のほうがよりすぐれている。創造性の低い子どもは、言語においても描画においてもかなり低い得点を示し、とくに言語では非常に劣っている。創造性が高いということは、5, 6才の時点では

その表現活動における言語が描画と同質のものになっていきつつあるのに反して、創造性が低いということは、描画による自己表現は可能であつても、言語はまだ十分に自己のことばとしてでてこない。つまり表現手段として十分に使いこなせていないということと思われる。

VI 結 論

以上の結果から目的において述べた仮説は次のように検証することができた。

(1) 言語および描画における創造性のあらわれかたは、発達のみにみて変化がなかった。しかし創造性の高低において、5才児がほぼ一定の平坦な直線で示されるのにたいして、6才児では一時的に減少し、再び増加するという変化が見出された。このことは5才から6才までと、6才から7才では、創造性の高低のちがひかたに質的なちがひがあることを意味していると考えられる。

(2) 創造性の高さを測定するために、絵本を媒介とし、言語と描画の二つの表現方法に共通した評価基準を作成した結果として、二つの間に有意な差がみられないことが判明した。

VII 要 約

子どもが自己表現するばあいには、その表現手段により創造性はどのようにあらわれるかという研究を、就学前の幼稚園児にたいしておこなつた。被験児は計32名で年令別に5才児、6才児の二つのグループに分類し、創造性の高低の程度を知ろうとした。そして次の結論を得た。

(1) 創造性は言語においても描画においても発見され、年令的にも差はみられない。

(2) 創造性が高いか低いかは、自己を表現するためにその子どもが表現手段をどの程度に自分のものとしているかによるものである。

(3) 絵本を用いて言語と描画に共通する創造性の評価基準を作成した結果として、創造性のあらわれかたを規定することができた。

VIII 今後の問題

子どもが自己をどのように表現するかを、その表現手段のすべてに共通するひとつの尺度で測定することは、その創造性の発達段階を知るとともに、人格を形成していく要因をつかむためにも大切である。そこにはじめて芸術・創造性・心理・教育・臨床¹⁴⁾への橋渡しが可能となってくる。そのためには本研究の尺度は、さらに因子分析をおこない、統制されなければならないと考えられ

る。媒介として用いた絵本については、絵とことばの融合体であるために純粹に文学として、絵画としてとりあげられないという理由から放置されてきた。しかし本研究では、絵本の絵画とことばを切離し、この二つが独立して存在しうると同時に、共に補いあつて有効な効果をおこすことを検討した。本研究のばあいに普通児のそれとかなり知能の高い子どもを対象としたが、さらに知能の低い子どもや情緒的に問題をもつ子どもなどの創造性のあらわれかたをみていく必要がある。このように絵本は、絵画・ことば、絵画とことばの三つの機能をもつために、コミュニケーションに障害をもつ子どもにとつてもひとつのコミュニケーションの場をつくることが可能となると考えられる。

本研究は絵本の研究においてたんにひとつの試みをしたにすぎない。児童文学のなかで絵本が絵本として、絵画とことばの両面をもつ存在としてその位置を確実にしていくために、この試みを足がかりにし、次にどのような研究をしていけばよいかが考えられる必要がある。それは結局のところ文学を文学とし、絵画を絵画として深めていくためにも必要であろう。今後もそれらの問題を科学的に分析し、そこで得たものをふたたび文学や絵画に返すことが課題である。

資料4 言語例

創造性の高い例

N. M.

びりびり君は長靴を買つてテクテク歩いていき。傘屋さんへ行つた。傘を買つた。びりびり君はカマがぼ一つといつたら黒いのがでてきてまつ黒になつてしまつた。石けんを使つて洗つたら白くなつた。幼稚園から帰つて手を洗つて顔をふいたら、びりびり君は水道の水のなかにしゅーとはいり、水道屋さんからびゅーとでてきたのでびつくりしてしまつた。こんどは電気がびーとするのにひつついたので「ひやーまたや」と逃げていつた。そこには化粧品屋さんがあつた。口紅をくわえたので、いつぱいついてしまつた。こんどは入歯屋さんがあつて入歯をいれてしまわはつた。クリスマスがきておじいさんが来たので、子どもたちが「サンタクロースさんですか」つていつたら、「おばーじやよ」といつたので、女の子は倒れて、男の子は壁を破つてとんでいつた。ソリは変なソリでね、ウサギやロバが乗つていた。お母さんが来て女の子をお医者さんにつれていつて治してもらつた。お腹のなかにおばあさんの入歯がとんできてはいつていた。

H. S.

歩いていくと時計があつて、時計を食べるとからだが一
つに分れてしまった。また歩いていくとからだが一
つになつて、クツが一つになつてしまった。また歩いてい
くと八びきになつて十六になつた。それから歩いていく
と、もどりの一びきになつた。一番おしまいにもと
のびりびり一びきを貼るといいのに。

R. M.

「びりびり君てひよこの卵かな、カマキリかな、ひき
がえるの卵かな」「ニワトリの卵といつてもヒヨコには
羽があるし、ちがうかな」雨だから長靴をはいて、列を
つくつてエサを捜しに行つた。「サナギかな、何かの赤
ちゃんかな」びりびりの赤ちゃんが生まれた。16びきで
数が多くなる。それから小さいびりびりは大きくなつ
て、またこんな風に割れていつぱいのびりびりが生まれ
てくる。

創造性の低い例

E. U.

公園へいつてブランコにのる。お出かけは東京へ超特
急につてお仕事にいく。キャラメルを買いに市場へ行

く。

H. S.

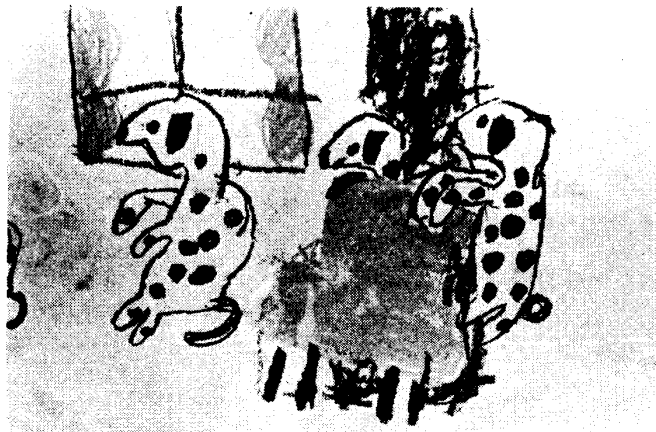
のはらへ遊園地に遊びに行くけど、びりびりは手がな
いからお金もつてない。

X 参考文献

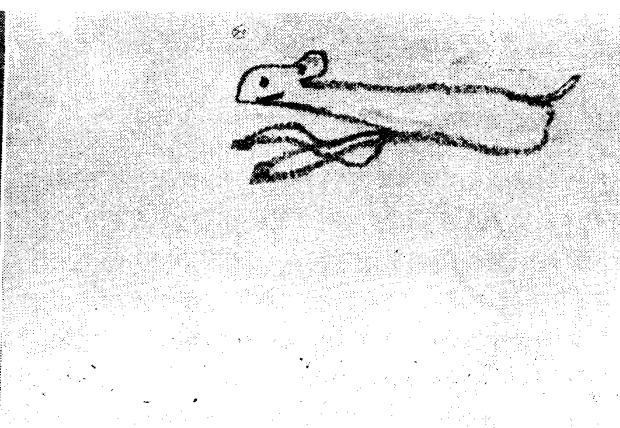
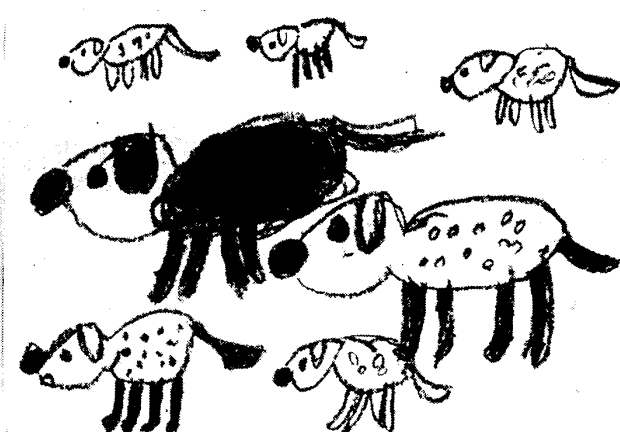
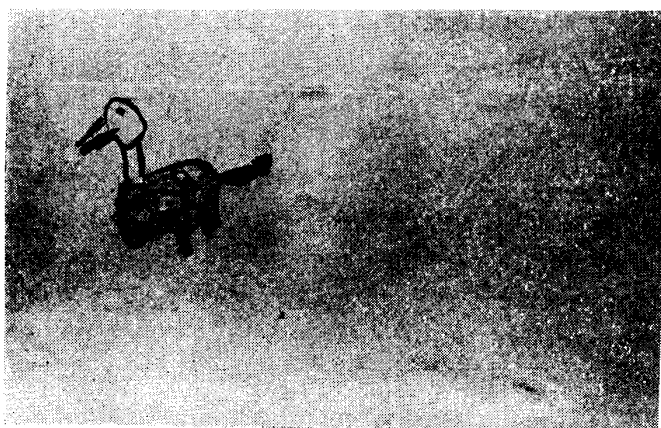
- 1) 中央児童福祉審議会文化財部会編：こどものための文化財，日本児童福祉協会 1966.
- 2) Bossard, J. and Boll, E.S. : The Sociology of Child Development, Happer & Row, 1965.
- 3) Johnstone, W. : Child Art to Man Art. Macmillan, 1949.
- 4) 黒河内平：国文学鑑賞と解釈，27巻，13号（現代児童文学事典），至文堂，1963.
- 5) Söntgerath, A. : Das Kind in der Literatur des 20. Jahrhunderts, Kohlhammer, 1966.
- 6) 東 君平：びりびり，至光社
- 7) 鳥越 信，森久保仙太郎：3歳から6歳までの童

資料5 描 画 例

創造性の高い例



創造性の低い例



- 話と絵本，誠文堂新光社，1967.
- 8) 講談社ディズニー絵本：101匹のわんちゃん大行進，講談社，1962.
- 9) Piaget, J. : La Language et la Pensée chez l'Enfant. Davis, 1923.
- 10) 野口栄子：芸術の教育性について，京都府立大学学術報告 3 巻 5 号，1963.
- 11) 野口栄子：絵画の心理，美術教育 108 号，日本美術教育学会，1965.
- 12) Guilford, J. P. : The Nature of Human Intelligence, New York, 1965.
- 13) 恩田 彰，野村健二：生産性と創造性についての研究，教育心理学会論文集第 7 回，1965.
- 14) Axline, V.M. : Play Therapy, Houghton Mifflin Com., 1947.
- (山中喜久子は京都府立大学研究生)
(1968年 7 月31日受理)